

國史掣要

順德至後醍醐

卷五

甲
第廿六

リ 5
16
5



門 5
號 16
卷 5

國史攬要卷之五

笠間

○順德天皇

諱ハ守成

後鳥羽天皇第二ノ皇子也、母ハ

修明門院

○十一月、天皇

大政官廳ニ於テ即位、時ニ年十四、後鳥羽上皇政ヲ院中

ニ聽ク、○建保元年、信濃人泉親衡、故ノ將軍頼家ノ子千

壽丸ヲ奉シ兵ヲ起メ比條、義時ヲ討ツ、義時兵ヲ遣テ之

ヲ攻ム、親衡勇力アリ數十人ヲ殺メ逃ル、千壽鬚ヲ削テ

京師ニ匿ル、於是其黨百餘人ヲ捕フ、和田義盛ノ子義直



編輯

國史攬要

○順德

義重及ヒ姪胤長モ亦夕執ヘラル、義盛二子ノ命ヲ乞フ、
實朝元ヨリ義盛ヲ親信ス故ニ之ヲ釋ルス、明日、又其族
九十八人ヲ率テ幕府ノ庭ニ列シ、胤長ノ命ヲ乞フ、義時
帝ニ其強宗ヲ忌ミ激シテ之ヲ除カント欲シ、故ラニ胤
長ヲ縛メ其前ヲ過キ之ヲ吏ニ属ス、義盛且慙チ且怒ル、
胤長ノ弟幕府ニ隣ル、義盛之ヲ實朝ニ請テ得タリ、義時
之ヲ奪テ族人ニ與フ、義盛益怒リ遂ニ兵ヲ舉テ義時ヲ
攻ム、義時府ニ入テ實朝ヲ護ス、義盛ノ三子義秀驍勇絶
倫門ヲ排メ入テ戰フ、一府中敢テ當ル者ナシ、當ル者皆
死ス、火ヲ繼ツ者アリ、烟焰空ニ漲ル、義時實朝ヲ奉メ法

華堂ニ避ケ、泰時衆ヲ勵マシテ戰フ、接戦スル一昼夜
義盛ノ兵人馬皆疲レ、天明退テ前濱ニ陣ス、横山時兼三
千騎ヲ以テ來リ援シ、軍復タ振フ、北條氏ノ兵益々加リ
生騎以テ迭々戰フ、輒チ義秀ノ為ニ破ラル、日暮ニ及テ義
盛ノ兵益々疲勞シ、義直戰死ス、義盛氣大ニ沮ミ、遂ニ箭
ニ中テ死ス、七子及ヒ其族皆奮闘シテ死ス、獨リ義秀殘
兵五百ヲ率テ海ニ航メ安房ニ走リ終ル所ヲ知ラス、或
ハ曰、三韓ニ入り壽ヲ以テ終フト、今朝鮮釜山浦ノ絶影
島ニ其祠アリト云、義時乃チ和田氏ノ邑ヲ分テ將士ヲ
賞シ、時ニ泰時ノ功第一タリ、泰時辭シテ曰、是私闘ナリ

吾レ父ノ為ニ寇ヲ防クノミト賞ヲ受ケス。○十一月義
盛ノ遣臣千壽ヲ奉シテ兵ヲ京師ニ集ム守衛ノ卒攻テ
之ヲ殺ス。○六年實朝権大納言ニ遷リ、三月右近衛大將
ヲ兼ヌ、大江廣元間ニ乗メ謂テ曰、將軍廢ヲ子孫ニ貽ン
ト欲セハ諸兼官ヲ辞スヘシ是レ滿ヲ持スルノ道ナリ、
實朝曰、卿カ言誠ニ然リ然レ源氏ノ系日々縮ル宜ク吾
身ニ及テ官爵ヲ取り家名ヲ盛ンニスヘシ子孫ヲ慮ル
ニ暇テラスト、廣元對ルテ能ハスメ退久時ニ宋ノ佛工
陳和卿來テ大和ニ在リ、實朝召シテ之ヲ見ル大ニ其言
ヲ悦ビ、遂ニ宋ニ往ント欲シ、命シテ大船ヲ造ラシム、諸

臣諫レヒ聽カス、船成ルニ及テ用ユ可ラス、遂ニ止ム、或
ハ曰、實朝禍ヲ避テ宋ニ往ント欲スルナリ、○六月、義時
故ノ頼家ノ子公曉クキョウヲ京師ヨリ召シテ鶴岡別當ニ補ス、
公曉宿願アリ鶴岡祠ニ祈ルテ千日、○十月、實朝右大臣
ニ任シ尋テ内大臣ニ進ム、○承久元年、正月、大臣拜賀ノ
禮ヲ鶴岡祠ニ行フ、廿七日ノ夜、戌牌ヲ期ト為ス、期ニ臨
テ大江廣元謁メ曰、暮夜恐クハ虞アリ、昼日ヲ用フ可シ、
仲章曰、夜ヲ用ルハ故事ナリ、廣元曰、然ラハ則チ甲ヲ衷
メ變ニ備フ可シ、仲章曰、大臣ハ甲ヲ衷セス、既ニ出ツ隨
兵千騎、公卿悉ク從フ、義時侍シテ劔ヲ執ル、祠門ニ及テ

俄カニ疾作ルト稱シ、劔ヲ仲章ニ授ケテ退ク、實朝禮畢
テ階ヲ下ル、人アリ階側ヨリ跳リ出テ、刀ヲ揮フ、實朝
ノ首地ニ殞ツ、又揮フ、仲章倒レテ死ス、夜正ニ暗黒、中外
驚噪シ誰ノ為ス所ヲ知ラス、已ニメ大ニ呼フ者アリ、曰
公曉父ノ仇ヲ報スルナリト、衆始テ其所為ナルヲ知リ、
馳セテ其坊舎ヲ圍ム、公曉走テ備中阿闍梨ノ家ニ匿レ、
三浦義村ニ謂ハシメテ曰、吾當サニ將軍タルヘシ、子宜
ク之ヲ計畫セヨ、義村大ニ驚キ佯テ之ヲ諾シテ曰、當サ
ニ兵士ヲ以テ迎フヘシト、乃チ急ニ義時ニ告ク、義時政
子ノ命ト稱シ、速ニ之ヲ殺サシム、義村即チ長尾定景等

ヲ遣テ之ヲ途ニ斬ル、公曉常ニ實朝義時ヲ殺メ父仇ヲ
報セント欲ス故ニ此ニ及フ、然レモ義時ノ為ニ誑カサ
ル、ヲ知ラス、義時手ヲ公曉ニ假テ實朝ヲ弑シ、遂ニ公
曉ヲ殺シ、已レ賊ヲ殺スノ名ヲ取テ弑逆ノ實ヲ避ケ、乃
チ其主家ヲ奪フ、而シテ當時一人ノ之ヲ議スル者ナシ、其
茲計ノ巧ナル、恐レサル可ケンヤ、實朝年二十八、公曉年
十八、頼朝府ヲ開テヨリ四十年、源氏正統是、於テ絶ユ、○
七月、義時政子ト議シ、諸將ト連署シテ皇子ヲ以テ鎌倉
ノ主ト為ンコトヲ請フ、上皇許サス、左大臣藤原道家ハ頼
朝ノ姻親ナリ、因テ其子頼經ヲ迎テ鎌倉ノ主ト為ス、年

甫テ二歳義時執權タリ、政子政ヲ簾内ニ聽ク、政子明決ニメ權數アリ、人稱シテ尼將軍ト曰フ、從二位ニ拜スルヲ以テ、又タ二位尼ト曰フ、○三年四月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル帝英敏ニノ典籍ヲ好ミ和歌ヲ能ス、親クハ雲抄禁秘抄ヲ撰ム、仁治三年九月十二日崩ス、壽四十六、○仲恭天皇 諱ハ懷成^{カネナリ}明治三年七月謚號ヲ奉ス、順德天皇第一ノ皇子也、母ハ東一條院、○四月、天皇即位、藤原道家攝政タリ、後鳥羽上皇政ヲ院中ニ決ス、○初ノ後鳥羽上皇常ニ源氏ノ朝廷ヲ脅制スルヲ憤リ、鎌倉ヲ圖ルノ志アリ、新タニ西面ノ武士ヲ置キ、親ク刀ヲ鍛ス

ルニ至ル、實朝ノ害ニ遭フニ及テ、以為ラク朝權復ス可シト、而ノ鎌倉ノ權勢自若タリ、上皇益々不平ナリ、一日熊野ニ幸ス、仁科盛遠^{ニシナモト}其子ヲ携テ路傍ニ伏スヲ見、擢テ、西面ニ補ス、義時怒テ盛遠カ邑ヲ奪フ、上皇救シテ之ヲ復セシム、義時救ヲ奉セス、上皇長江倉橋ノ莊ヲ以テ、寵妓龜菊ニ賜フ、其地頭之ヲ嘲侮ス、龜菊怒テ上皇ニ訴ス、乃チ救メ其地頭ノ職ヲ免セシム、義時又タ救ヲ奉セス、上皇益々怒ル、三浦胤義妻ノ故ヲ以テ義時ヲ恨ミ、京師ニ戍メ還ラス、上皇藤原秀康ニ命シテ昔ヲ喻サシム、胤義喜テ詔ヲ奉シ且ツ曰、臣カ兄義村ヨク義時ヲ誅セ

上皇大ニ悦ビ、五月城南ノ沘鯨馬ニ託ノ近畿ノ兵ヲ
徴シ、先ツ京師ノ守護伊賀光季ヲ攻テ之ヲ殺シ、四方ニ
詔シテ義時カ官爵ヲ奪ヘ罪ヲ聲^{ナラ}シテ之ヲ討ツ、先是健
歩ノ僮押松^{フシマツ}ニ命シ、密カニ院宣ヲ以テ關東ノ諸豪ヲ諭
シ、別ニ胤義ニ昏ヲ作ラシメ重賞ヲ以テ義村ヲ誘フ義
村其昏ヲ義時ニ示シ、貳心無キヲ誓フ、義時驚ク色ナク、
速カニ押松ヲ捕ヘテ院宣ヲ焚キ、大ニ諸將ヲ會メ之ヲ
議ス、義村景盛等足柄箱根ヲ扼セント欲ス、廣元曰、險ヲ
守テ日ヲ度ヘ人心或ハ變セン直チニ進テ京師ヲ犯ス
ニ如カス、義時之ニ從ヒ、泰時ヲ以テ將ト為シ、兵^ヲ至ル

ヲ侍^リ、廣元曰、武勳先ツ單騎ニノ獲ス可シ、誰カ從ハサ
ル者アラシ、泰時即チ時房足利義氏三浦義村ト十八騎
ヲ率テ發ス、行ク^ト三日兵属スル者十餘萬人、東海道ヨ
リ進ム、式部丞朝時北陸道ヨリ進ミ、武田信光、小笠原長
清等東山道ヨリ進ム、兵九十九萬人、押松ヲ放チ還シ、大
軍已ニ至ルヲ報セシム、京師震駭ス、上皇曰、必ス義時ヲ
誅スル者アラント、乃チ諸軍ヲ部署シ、秀康胤義^{タケヨシ}等美濃
尾張ノ間ニ屯シ、仁科盛遠宮崎定範糠谷有久等越中ニ
屯シ、北陸道ヲ扼ス、東軍ノ將信光、長清等、大井ノ渡ヲ乱
リ、官軍ノ將大内惟信ヲ擊テ之ヲ走ラス、秀康胤義亦タ

國史要略 卷五
○仲恭
六

敗レテ退ク、泰時時房等、官軍ノ將山田重忠、鏡久、綱ヲ擊
テ之ヲ破リ、信光ト軍ヲ合シ、鼓行ノ進ム、北陸ノ官軍、寒
原ノ險ヲ扼ス、東軍ノ將朝時、夜ル牛數十頭ヲ聚メ、炬ヲ
其角ニ束テ之ヲ驅ル、官軍大ニ破レ退テ礪並山ニ戰フ、
定範敗レテ支リ、盛遠戰テ死ス、三道ノ諸將還テ敗狀ヲ
奏ス、中外色ヲ失フ、於是大納言忠信、中納言有雅、參議範
茂等ニ命シ、諸將ト共ニ二萬五千餘騎ヲ率ヒ、分ツテ宇
治勢多波ヲ守ル、時ニ水潦方ニ漲リ、橋ヲ撤メ、亂射ス、東
軍利アラズ、溺ル者數百人、已ニ東軍流ヲ乱テ進ミ、
更ニ筏ヲ結テ以テ渡ル、官軍支フルコト能ハズ、遂ニ宇ヲ

棄テ、走ル、藤原朝俊、鏡久、綱、八田知尚、佐々木氏綱、經高
等前後ミナ死ス、上皇大ニ惧レ、諸將逃レ歸ル者門ヲ閉
テ納レス、泰時進テ京ニ入ントス、院宣使ノ至ルニ遇フ、
乃チ馬ヨリ下リテ之ヲ受ク、宣ニ曰、近日ノ事、宸衷ニ由
ルニ非ス、謀臣ノ為ニ誤ラル、今事々請フ所ニ從フ可シ、
輦下ヲ擾ルコト勿レ、泰時等六波羅ニ入テ首謀ノ者ヲ求
メ、權大納言藤原忠信、權中納言源有雅、藤原光親、藤原宗
行、參議藤原範茂、藤原信能、六人ヲ捕ヘ、諸將ニ分チ属シ、
東國ニ押送ス、皆途中ニ斬ル、獨リ忠信、鎌倉ニ親アルヲ
以テ宥メ、越后ニ配ス、胤義、重忠等皆自殺ス、○七月、義時

遂ニ天皇ヲ廢シテ高倉帝ノ孫茂仁親王ヲ立テ、後鳥羽上皇ヲ隱岐ニ遷シ、順徳上皇ヲ佐渡ニ雅仁頼仁兩親王ヲ但馬備前ニ遷ス、土御門上皇ハ謀ニ與ラス且ツ之ヲ諫ルヲ以テ問ハス、上皇敕ノ曰、朕獨リ留ルニ忍ビシヤト、乃チ土佐ニ遷ス、帝在位僅ニ四月、文曆元年、五月廿日崩ス、壽十七、

○後堀河天皇

諱ハ茂仁

高倉天皇ノ皇孫ニメ守貞親王ノ皇子也、母ハ藤原氏北白河院、○七月、天皇踐祚、藤原家實攝政タリ、十二月、太政官廳ニ於テ即位ノ禮ヲ行フ、○北條泰時時房、六波羅南

北ノ兩府ニ居テ京師ヲ鎮ス、之ヲ兩六波羅ト稱ス、○貞應元年四月、上御門上皇阿波ニ遷ル、○元仁元年、北條義時卒ス、義時深沉ニ權變アリ、外謙遜ヲ示シ、内狡險測ル可カラス、卒スル年六十三、或ハ曰、近侍ノ為ニ刺シ殺サルト、恭時嗣テ執權タリ、○北條時氏時盛代テ六波羅ヲ鎮ス、○恭時已ニ職ヲ嗣クハ弟アリ、後母藤原氏ノ出多シ、恭時父ノ邑ヲ割テ悉ク之ニ與ヘテ曰、吾執權タリ、復タ求ムル所ナシ、藤原氏其弟光宗ト謀リ、其所生ノ政宗ヲ執權トシ、女婚藤原實雅ヲ將軍ト為ントス、府下洵然タリ、衆恭時ノ為ニ之ヲ危フム、恭時舉止自若タリ、已

ニシテ政子頼経ヲ抱テ恭時ノ第二入り、實雅ヲ京師ニ
歸シ、光宗ヲ信濃ニ流シ、藤原氏ヲ北條ニ徙ス、事即チ定
ル恭時其黨ヲ問ハス、○嘉祿元年、大膳大夫政所別當大
江廣元卒ス、○七年、頼朝ノ夫人政子薨ス、政子政ヲ鎌倉
ニ聽ク者七年將士畏服ス、○十月、新制三十六條ヲ下ス
○二年、春、頼経ヲ以テ征夷大將軍ト為ス、○寛喜二年、天
下ノ米價ヲ定ム、米一斛ノ價錢一貫文ニ當ル、○貞永元
年、恭時式目五十條ヲ定ム、之ヲ貞永式目ト曰ス、○冬、權
中納言定家新敎撰和歌集ヲ上ル、定家嘗テ當時ノ和歌
百首ヲ撰テ嵯峨中院ノ障子ニ畚ス、世之ヲ百人一首ト

謂フ、○十月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、文暦元年、八月六日
崩ス、壽二十三、
○四條天皇ミツヒト諱ハ秀仁、
後堀河天皇第一ノ皇子也、母ハ藻壁門院關白道家ノ女
○十二月、天皇太政官廳ニ於テ即位、甫テ二歲、關白敎實サネ
攝政タリ、敎實將軍頼経ト同ク道家ノ子ニシテ、道家又ク
帝ノ外祖タリ、故ニ威權赫然、朝野心ヲ傾ク、○嘉禎元年、
三月、攝政敎實薨ス、是ヲ九條ノ祖ト為ス、道家復タ攝政
タリ、○曆仁元年、大將軍頼経入朝ス、恭時諸國ノ武士ヲ
率テ陪從ス、○仁治三年、正月八日、天皇崩ス、壽十二、帝幼

國史 卷五
四條 後嵯峨
九

冲ニノ游嬉ヲ好ミ、滑石ヲ宮廊ニ塗リ、宮嬪ノ倒仆スルヲ見テ樂トナス、遂ニ誤テ自ラ仆テ傷ツキ崩スルニ至ル、北條泰時土御門帝ノ皇子ヲ立ツ、

○後嵯峨天皇 諱ハ邦仁

土御門天皇第四ノ皇子也、母ハ贈皇太后源氏○三月、天皇太政官廳ニ於テ即位○先帝崩シテ嗣ナシ、前攝政道家、順德帝ノ皇子ヲ立ントス、泰時土御門帝ノ東征ニ與カラサルヲ以テ其皇子ヲ立ントテ欲シ、安達義景ヲ京師ニ遣ル、義景途ヨリ還テ問テ曰、若シ順德帝ノ皇子先立タハ之ヲ如何シ、泰時曰、之ヲ廢ス可シ、義景至リ終

帝ヲ立ツ、道家争フヲ能ハス、○六月、北條泰時卒ス、年六十、泰時寛厚ニノ局量アリ、嘗テ柎尾ノ僧高辨ニ禪學ヲ受ケ、其治一ニ無慾ヲ以テ主ト為ス、評定衆十二人ヲ置キ之ト誓テ曰、我輩天下ノ直道ヲ司ル者也、若シ偏私スルコト有ラハ、神明之ヲ罰セヨ、断獄ノ吏ニ令シテ曰、輕罪ハ其身ニ止ル、決メ羅織スルコト勿レ、盜竊スル者ハ倍シテ之ヲ贖ハシム、執權ヲ以テ自ラ驕ラス、常ニ諸將ト幕府ニ宿直シ、老ニ至テ懈ラス、其政府ニ参スル衆ニ先ツテ入り、勤儉ヲ以テ將士ヲ勵マス、將士ノ富家ニ貸ル者ハ自ラ之ヲ償ヘ、饑歲ニハ倉ヲ開テ民ヲ救フ、故ニ海

内無事卒スルニ及テ天下之ヲ惜ム、孫經時代テ執權タ
リ、經時亦タ吏事ニ長ス、○寛元二年、大將軍頼經職ヲ辞
ス、經時其子頼嗣ヲ立テ職ヲ襲ク、甫テ六歳、頼經年二十
六、○四年正月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、帝慈仁ニメ物ヲ
愛シ、朝野心ヲ歸ス、北條ノ推戴ニ頼テ敢テ自ラ專ラニ
セス、海内無事、庶民業ヲ樂ム、文永九年、二月十七日崩ス、
壽五十三、

○後深草天皇 諱ハ久仁

後嵯峨天皇第二ノ皇子也、母ハ大宮院、○三月、天皇太政
官廳ニ於テ即位、甫テ四歳、關白實經攝政タリ、上皇政ヲ

院中ニ聽ク、○閏四月、北條經時卒ス、年三十三、弟時頼嗣
テ執權タリ、○七月、時頼其従父光時ヲ伊豆ニ流シ、頼經
ヲ京師ニ送ル、初メ光時寵ヲ頼經ニ受ク、回テ勸メテ時
頼ヲ圖ラシメ、己レ其職ニ代ラント欲ス、己ニメ事露ハ
レ、時頼兵ヲ集テ自ラ衛リ、兵士ノ幕府ニ入ルヲ遏ム、光
時疑ヲ削テ罪ヲ謝ス、乃チ之ヲ伊豆ニ流シ、三浦光村ニ
命シ、頼經ヲ護送シテ京師ニ送リ還ス、○時頼意ヲ銳ニ
メ、治ヲ圖リ、嘗テ青砥藤綱ヲ擢テ引付衆ト為ス、藤綱廉
潔學ヲ好ム、公文ナル者、北條ノ邑人ト田ヲ争テ訟フ、諸
吏北條ヲ畏レテ公文ヲ曲トス、藤綱覆議ノ之ヲ断シ、田

ヲ以テ公文ニ還ス、公文喜ヒ、錢三百緡ヲ以テ密カニ藤
綱ノ庭内ニ置テ去ル、藤綱怒テ曰、公平訟ヲ断スルハ、天
下ノ直ヲ直トスル也、豈特リ汝カ為ニセンヤ、苟モ我カ
公平ナル、相摸公宜ク賞セラレ可シ、烏ソ汝カ貨ヲ用ン
ヤト、錢ヲ以テ其家ニ還ス、嘗テ夜ニ行テ滑川ヲ過ク、十
錢ヲ水ニ落ス、乃チ五十錢ヲ以テ炬ヲ買ヒ、撈シテ之ヲ
得タリ、或小ヲ得テ大ヲ失フヲ笑フ、藤綱曰、十錢小ナリ
ト雖、氏之ヲ失ハハ永ク天下ノ寶ヲ損ス、五十錢我ニ損
アリテ人ニ益アリ、今ハ六十錢ヲ取テ世ニ益ス、其利亦
タ大ナラスヤ、聞者感服ス、時頼之ニ祿ヲ加ニシ、謂

テ曰、夢ニ神アリ我ニ告テ汝ニ祿ヲ増サシム、藤綱固ク
辭シテ曰、君夢ヲ以テ吾レヲ賞ス、亦夢ヲ以テ吾レヲ斬
ルカ、藤綱時頼時宗ニ仕テ食邑數十所入ル所ノ俸皆貧
困ニ施ス、清約自ラ奉シ、布衣袴褶、刀室漆セス、於是姦吏
皆退キ、風俗大ニ草々、○寶治元年六月、北條時頼攻テ三
浦泰村光村ヲ殺ス、初メ光村罷ヲ頼經ニ受ケ、頼經ヲ護
シテ京師ニ至リ、辭スルニ及テ涕泣ニ堪ハス、密カニ迎
復ノ事ヲ議ス、既ニ還リテ潛カニ兵ヲ其邑ニ徵シ、泰村
ニ勸テ事ヲ舉シム、泰村決セス、時頼ノ外祖安達景盛元
ヨリ泰村ト權ヲ争テ相惡ム、時ニ高野ニ在リ、竊カニ府

下ニ來リ、屢ク時頼ノ弟ニ往キ密議スル所アリ、頼時事ヲ以テ三浦ノ弟ニ至ル、族人畢ク集リ、迭ニ出テ酒ヲ侑ム、舉止常ニ異ナリ、又障外ニ鎧冑ノ聲ヲ聞ク、時頼從士ヲ呼テ俄カニ歸ル、恭村驚懼、安シセス、時頼又々人ヲ遣テ夜ル其第ヲ偵ハシム、益々器仗ヲ儲テ、因テ兵ヲ集テ自ラ衛レ、將士争ヒ至リ、府下大ニ噪ク、恭村使ヲ遣テ時頼ニ陳謝シ、兵ヲ罷シ、請フ、時頼温言之ヲ喻シ、又昏ヲ贈テ速カニ兵ヲ罷シム、恭村大ニ喜ヒ、使者出ツ、俄ニノ門外騷然、景盛ノ兵來リ攻ム、恭村大ニ駭キ急ニ之ヲ拒ク、時頼ノ兵亦々來リ援シ、火ヲ其隣邸ニ縱ツ、恭村

支ユル能ハス、出テ法華堂ニ走リ、其族二百七十餘人ト同ク頼朝ノ影前ニ自殺ス、餘黨少長トナク皆殺サル、○建長四年二月、北條時頼大將軍頼嗣ヲ廢シテ京師ニ送リ還ス、初メ前將軍頼經其廢セラレ、ヲ憤リ、北條氏ヲ討シ、一ヲ謀リ、兵ヲ京師ニ集ム之ニ與スル者頗ル多シ、事未タ發セス、佐々木氏信僧了行、長久連等ヲ捕テ時頼ニ送ル、時頼嘗ノ實ヲ得タリ、乃チ頼嗣ヲ廢シテ京師ニ送ル、是月關白道家暴カニ薨ス、道家ハ頼經ノ父ナリ、嘗テ密旨ヲ三浦光村ニ傳フ、故ニ北條氏之ヲ忌ム、○三月、時頼奏シテテ後嵯峨帝ノ皇子、宗尊親王ヲ迎ヘテ鎌倉

ノ王ト為シ其親王タルヲ以テ尊崇ヲ加ヘ幕府ヲ改造
シテ之ヲ奉ス、四月親王ヲ拜シテ征夷大將軍ト為ス○
十月、近衛兼經攝政ヲ罷メ、其弟兼平攝政タリ、是ヲ鷹司
家ノ祖ト為ス、先皇 道家ノ長子教實九條家ヲ嗣キ、已
ニノ次子良實ヲ三條家ト號シ、三子實經ヲ一條家ト稱
ス、今又タ近衛分レテ鷹司ト為ル、之ヲ五攝家ト稱ス、北
條氏奏シ請テ其權ヲ分ツナリ○康元元年、前將軍賴經
賴嗣相繼テ薨ス、時賴病ヲ以テ職ヲ辞シ、薙髮シテ最明
寺ニ居ル、其子時宗知ナルヲ以テ、族長時ヲメ執權タラ
シム○正元元年、十一月天皇位ヲ皇太弟ニ禪ル、嘉元二

年、七月、十六日崩ス、壽六十二、
○龜山天皇 諱ハ恒仁
後深草天皇ノ同母弟ナリ、○十二月、天皇大政官廳ニ於
テ即位、關白兼平攝政タリ、上皇政ヲ院中ニ聽ク、○弘長
元年、時賴僧日蓮ヲ伊豆ニ流ス、日蓮遠江ノ人、始テ法華
宗ヲ倡メ、諸宗ヲ誹謗スルヲ以テナリ、○三年十一月、北
條時賴卒ス、年三十七、時賴意ヲ政事ニ用ヒ、自ラ奉スル
甚タ儉薄、嘗テ族父宣時ヲ招ク、時已ニ深夜、時賴一壺ノ
酒ヲ挈テ出テ曰、偶此物アリ、卿ト之ヲ酌ント、乃チ紙燭
ヲ照シ、厨下ニ索メ、殘醬ヲ得テ酒ヲ佐ケ、終夜歡飲ス、職

ヲ解クニ及テ間使數十人ヲ發シ裝ノ行脚僧ト為シテ
 諸道ヲ分チ巡ラシム、冤枉ヲ發擿スルヲ神ノ如シ、風化
 大ニ行ハル、或ハ云時頼親ク出テ四方ヲ省察スト、卒ス
 ルニ及テ悲慕スル者甚多シ、○文永三年七月北條時宗
 大將軍宗尊親王ヲ廢シテ京師ニ送り還シ、其子惟康王
 ヲ立テ、鎌倉ノ主トナス、先是將軍病ト稱メ出テス、僧
 良基等祈禱ト稱シテ日夜親近ス、頗ル物議アリ、府下騷
 然、良基出テ高野山ニ奔リ食ヲ絶テ死シ、嚴慧亡命ス、時
 宗遂ニ將軍ヲ廢シテ之ヲ京師ニ送ル、尋テ惟康ヲ拜メ
 征夷大將軍ト為ス、甫テ三歲、○五年二月、是時ニ當テ胡

元ノ主忽必烈、宋ヲ滅シ隣國ヲ服從シ、遂ニ韓人ニ因テ
 昏ヲ致シ通好ヲ求ム、朝廷鎌倉ニ下シテ議ス、時宗ソノ
 昏辭無禮ナルヲ以テ卻テ受ケス、○六年春、元ノ使役々
 對馬ニ來ル對馬ノ守拒テ納レス、島人二人ヲ虜ニメ去
 ル、○八年九月、元ノ使者趙良弼、太宰府ニ來リ昏ヲ出シ
 テ報ヲ求ム、朝議答昏ヲ草メ鎌倉ニ示ス、時宗可カス、良
 弼ヲ逐ヒ還サシム、○十一年正月、天皇位ヲ皇太子ニ禪
 ル、帝天資英敏ニノ才藝多ク膂力人ニ過キ和歌ヲ好ム、
 嘉元三年九月十五日崩ス、壽五十七
 ○後宇多天皇 諱ハ世仁

龜山天皇第一ノ皇子也、母ハ京極院藤原氏○三月、天皇
太政官廳ニ於テ即位甫テ八歳、關白忠家攝政タリ、上皇
政ヲ院中ニ聽ク○十月、元人兵三萬ヲ以テ對馬ニ寇ス、
宗資國戰テ之ニ死ス、遂ニ壹岐ニ寇ス、平景隆戰テ之ニ
死ス、進テ太宰府ヲ犯ス、府兵力戰ノ之ヲ防キ、賊景資
射テ賊將劉復亨ヲ殺ス、虜軍夜ル遁ル、府兵追撃シテ船
及ヒ賊百二十人ヲ獲テ之ヲ斬ル○建治元年、四月、元ノ
使者杜世忠、何文著等九人、長門室津ニ來リ、必ス我カ報
ヲ得ント欲ス、五月、之ヲ鎌倉ニ致ス、時宗、杜世忠等五人
ヲ龍口ニ斬リ、太宰府及ヒ沿海ノ諸州ニ命シテ守備ヲ

脩メ、京師大番ノ兵ヲ罷メ、鎮西ニ遣リ以テ元寇ニ備フ
○十一月、北條實政ヲ以テ九州ノ探題ト為ス、探題此ニ
始ル○二年、僧一遍始テ時宗ヲ唱ヘ、諸勅ヲ周游シテ人
ヲ化ス、世之ヲ游行上人ト云一遍ハ伊豫河野ノ族ナリ、
○弘安二年、六月、元將夏貴、范文虎等來リ、部將周福、樂忠
陳光等ヲ太宰府ニ遣シ、喻スニ通好ヲ以テス、時宗命シ
テ之ヲ博多ニ斬リ、更ニ兵ヲ菟紫ニ遣ル○四年、五月、元
主我カ再ヒ使者ヲ殺ス、ヲ聞テ怒リ、大ニ舟師ヲ發シ、
高麗ノ兵ヲ前導ト為シ、兵十萬餘人、范文虎、忻都、洪茶丘
等之ニ將トシ、戰艦海ヲ蔽フテ來リ寇ス、我兵壹岐對馬

ニ拒ク利アラズ、龜山上皇深々憂ト為シ親ク石清水ニ
祈リ、宸筆ヲ伊勢ノ太廟ニ奉シ身ヲ以テ國難ニ代ラン
トヲ祈ル、六月虜船筑紫ニ至リ、五龍山ニ據テ平戸ニ薄
ル、北條實政兵ヲ督シテ之ヲ拒ク、部將草野七郎、兵艦二
艘ヲ以テ夜ニ襲テ虜船ヲ燒キ二十餘人ヲ殺獲ス虜乃
チ大艦ヲ列シ、鐵鎖ヲ以テ之ヲ繫キ、板ヲ布テ馳騁ニ便
ニシ、弩ヲ設ケ砲ヲ放ツ、我兵近ツクトヲ得ス、河野通有
輕舸ヲ以テ進ミ、檣ヲ仆シテ梯ニ代ヘ、虜艦ニ登テ數十
人ヲ斬リ其將ヲ擒ニス、安達次郎大友藏人等繼テ進ミ、
力戦ノ數十人ヲ殺ス虜終ニ岸ニ上ルト能ハス退テ鷹

島ニ據ル、范文虎懼レテ先ツ逃レ去ル七月晦夜風雨大
ニ起リ海水掀蕩虜艦皆破ル、鎮西ノ兵勢ニ乘シテ掩撃
ス虜兵免ル、者無シ、張百戸ナル者餘衆三萬ヲ率テ博
多浦ニ走ル、我兵追撃シテ之ヲ殲ス、其生虜三口ヲ縱テ
國ニ還ラシム、元兵十萬餘人生キテ還ル者僅カニ三人、
時ニ宇津宮貞經兵ヲ率テ赴キ援ス、虜已ニ敗ル然レ師
ヲ班ヤス、益々守備ヲ修ム、元主忿恚メ再舉ヲ謀ル、其臣
劉宣固ク諫メテ止ム、○七年四月、北條時宗卒ス、子貞時
嗣テ執權タリ、年甫テ十四、時宗強毅ニメ器略アリ、元主
國ヲ滅ス、四十、西夏ヲ平ラケ西域ヲ定テ、再々我國ヲ

窺ハサル者ハ時宗ノカナリ、○八年十一月、貞時攻テ安達泰盛ヲ殺ス、時ニ泰盛外祖ヲ以テ專横ナリ、其子宗景謂ラク曾祖ハ頼朝ノ子ナリト、乃チ姓ヲ源氏ト改ム、貞時ノ家令領之ヲ内管平頼綱元ヨリ泰盛ト權ヲ争フ因テ諸シテ曰、彼レ姓ヲ改ム將軍ヲ希フナリ、貞時兵ヲ發メ之ヲ攻メ悉ク其族ヲ滅ス、人皆謂ラク三浦氏ヲ滅スノ報ナリト、頼綱益々專ナリ、後チ反テ謀テ誅セラル、○十年十月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、帝叡敏學ヲ好ミ和歌ヲ善ス、源親房稱シテ後三條帝ノ流亞ト為ス、正中元年、六月廿五日崩ス、壽五十八、

○伏見天皇 諱ハ熙仁

後深草天皇第二ノ皇子也、母ハ玄輝門院藤原氏、○正應元年、三月、天皇太政官廳ニ於テ即位、後深草上皇政ヲ院中ニ聽ク、○二年十月、北條貞時大將軍惟康親王ヲ廢ス、貞時惟康親王カ北條氏ヲ圖ルノ志アリト聞テ俄ニ之ヲ廢シ網代輿ニ倒載メ京師ニ送り還ス、世人曰、將軍京師ニ流サルト、貞時乃チ父明親王ヲ迎ヘテ鎌倉ノ主ト為ス、詔メ征夷大將軍ト為ス、親王ハ後嵯峨上皇第三ノ皇子ナリ、○三年三月、賊為頼夜ル禁内ニ入テ自殺ス、為頼淺原八郎ト稱シ、甲斐源氏ノ族、兇暴ニノ盜ヲ作ス、此

夜二子ト甲ヲ擲シ禁中ニ入テ、宮女ニ帝ノ所在ヲ問フ、
宮女欺テ曰、南殿ニ在リ、為賴入ル、帝中宮ニ在リ、女装シ
テ春日ニ避ク、衛士入テ之ヲ捕ントス、為賴二子ト俱ニ
紫宸殿ニ自殺ス、其屍ヲ六波羅ニ送ル、其箭ニ太政大臣
為賴ノ字ヲ刻シ、又其佩刀ハ前參議實盛カ家藏ノ寶刀
ナリ、因テ實盛父子ヲ收フ、初メ伏見帝ノ立ツヤ、後嵯峨
帝ノ遺詔ニ違フヲ以テ龜山上皇之ヲ喜ハス、為賴ノ事
アルニ及テ、世疑テ上皇ノ為サシムル所トス、上皇惧レ
テ誓昏ヲ貞時ニ賜フ、事乃チ解クルヲ得タリ、○永仁元
年又タ長門ノ探題ヲ置テ中國ヲ監セシム、職筑紫ニ同

シ、○四年源義世兵ヲ起メ北條氏ヲ討ント欲ス、事露ハ
レテ殺サレ、義世ハ源範賴五世ノ孫、吉見孫太郎ト稱ス
○六年七月、天皇位ヲ皇太子ニ禪ル、文保元年、九月三日、
崩ス、壽五十三
○後伏見天皇 諱ハ胤仁
伏見天皇第一ノ皇子也、母ハ准三宮藤原氏、○天皇雷小
路殿ニ於テ受禪、年甫テ十一月、太政官廳ニ於テ即位、
關白兼忠攝政タリ、上皇政ヲ院中ニ聽ク、○正安元年、元
ノ僧一寧博多ニ來ル、元主師ヲ出メ、敗績シ、我カ浮屠ヲ
信スルヲ聞テ、一寧ヲ以テ間諜ト為スナリ、貞時之ヲ伊

豆ニ流ス後チ赦シテ建長寺ニ居ラシメ尋テ洛東南禪寺ノ主ト為ス一寧一山ト號ス○正安三年正月天皇位ヲ皇太子ニ禪ル延元元年四月六日崩ス壽四十九時ニ後深草上皇ヲ本院ト稱シ龜山上皇ヲ中院ト稱シ後宇多上皇ヲ新院ト稱ス前後伏見帝ヲ并セテ五上皇アリ上皇ノ多キ古ヨリ無キ所ナリ

○後二條天皇

諱ハ邦治

後宇多天皇第一ノ皇子ナリ母ハ西華門院源氏○二月天皇太政官廳ニ於テ即位新院政ヲ院中ニ聽ク○初ノ伏見帝北條氏ヲ援立ク切アルヲ以テ密カニ貞時ニ言

ハシメテ曰龜山帝常ニ承久ノ事ヲ切齒シ之ニ報セシトヲ思フ其後ヲ立ルハ鎌倉ノ利ニ非ス卿其レ之ヲ圖レ貞時因テ伏見帝ト謀テ後伏見帝ヲ立ツ後宇多上皇悦ハス左中辨定房ヲ鎌倉ニ遣リ後嵯峨帝ノ遺詔ニ稱ハサルヲ誦ム貞時遂ニ後深草帝ト龜山帝トノ兩統十年コトニ送立ツノ策ヲ定ム因テ先ツ後宇多上皇ノ皇子ヲ立ツ乃チ天皇ナリ○北條貞時職ヲ罷メテ疑ヲ削リ師時時村代テ執權タリ時村ノ從弟宗方推テ争ヒ時村ヲ襲ヒ殺ス貞時怒テ之ヲ誅ス○嘉元二年本院崩シ明年中院崩ス○德治三年八月貞時大將軍又明親王

ヲ廢シテ京師ニ送リ、其子守邦ヲ立ツ、詔シテ征夷大將
軍ト為ス、年僅カニ七歳、親王在職二十年、貞時故無シテ
之ヲ廢ス、○是月廿五日、天皇崩ス、壽三十四、

○花園天皇

諱ハ富仁

伏見天皇第二ノ皇子ナリ、母ハ顯親門院藤原氏○天皇
正親町殿ニ於テ踐祚、伏見上皇政ヲ院中ニ聽久○延慶
元年十一月、天皇太政官廳ニ於テ即位、年甫テ十二、左大
臣冬平攝政タリ○應長元年十月、北條貞時卒ス、貞時時
頼ノ風ヲ慕ヒ、意ヲ政事ニ用ク、間使ヲ發シテ、僧形ト為
シ、四方ヲ省察ス、葭槁スル所多シ、後々間使亦タ茲ヲ為

ス、故ニ罷ム、或ハ云自ラ出テ之ヲ按スト、貞時ノ子高時
尚幼ナリ、其族基時貞顯、連署シテ夏ヲ行フ、○正和五年、
高時執權タリ、時二年十四、其舅安達時顯内管領長崎園
喜遺囑ヲ受ケ、政ヲ輔ク、○二年二月、天皇位ヲ皇太子ニ
禪ル、皇太子尊治親王ハ、後宇多上皇ノ皇子ニシテ、龜山上
皇ノ皇孫ナリ、龜山上皇其英敏ヲ愛シ、常ニ左右ニ置キ、
且ツ其踐祚ヲ欲シテ石清水ノ祠ニ祈ル、花園帝祚ヲ踐
ムニ及テ、議ノ後、二條帝ノ皇子、邦良親王ヲ立テ儲貳ト
為ントス、後宇多上皇曰、朕思フ所アリ、先ツ尊治ヲ立テ
、邦良ニ及ホス可シト、乃チ之ヲ立ツ、

○後醍醐天皇

諱ハ尊治

後宇多天皇第二ノ皇子也、母ハ談天門院藤原氏。○三月、
 天皇太政官廳ニ於テ即位、後宇多上皇政ヲ院中ニ聽ク、
 ○元亨元年、十二月法皇政ヲ還ス、天皇始テ記録所ニ御
 シテ民ノ訟訴ヲ聽斷シ、京畿諸所ノ新闢ヲ廢ス、民皆大
 ニ喜フ、帝夙興夜寐、意ヲ政治ニ留メ、日ニ公卿及ヒ儒臣
 ヲ召テ經史ヲ討論ス、僧玄慧才學ヲ以テ聞エ、又々召テ
 侍讀ト為ス、玄慧始テ宋儒程朱ノ學ヲ倡フ、○二年、夏、大
 ニ旱シ、穀價踊貴ス、敕ノ御膳ヲ減シ、檢非違使別當源親
 房ニ敕シテ飢民ヲ檢シ粟ヲ賑ハシ、富戸ニ喻ノ糶ヲ發

シテ監賣セシム、○是歲陸奥人安藤堯勢、ソノ族季長ト
 邑ヲ争テ鎌倉ニ訴フ、時ニ長崎圓喜職ヲ辞シ其子高資
 之ニ代ル、高資驕恣貪殘、黜陟ミテ賂ヲ以テ成ル、二人各
 々賂ヲ納ル、高資西ツナカラ之ヲ受テ訟ヲ決セス、二人
 怒リ遂ニ其邑ニ據テ叛ク、高時兵ヲ遣テ之ヲ討ツ、克ク
 ス、於是北條氏始テ人心ヲ失フ、而シテ高時昏昧恬然トシ
 省セス、日夜飲宴ヲ以テ事トナシ、尤モ田樂ヲ好ミ、優人
 ヲ集ル、數百人、宴間曲ヲ奏スレハ、滿坐纏頭シ、錦繡山ヲ
 成ス、又々鬪狗ヲ喜ヒ、吏民ヲメ狗ヲ貢セシム、狗數千頭、
 輿載シテ府下ヲ往來ス、士庶皆道ヲ避テ之ヲ禮ス、毎月

隊ヲ分ツテ之ヲ闘ハス、咆哮流血、屍ヲ争フ状ノ如シ、人皆以テ不祥ト為ス、一夕高時獨リ醉舞ス、倡十餘人來リ、歌舞ノ曰、天王寺ノ妖靈星ヲ見スヤト、歌ヒ終チ去ル、往ク所ヲ知ラス、侍姫竊カニ之ヲ闘ヘハ、倡ハ皆天狗ナリ、高資其昏乱ニ乘メ益ク威福ヲ恣ニス、高時稍ク之ヲ惡シ、長崎高頼ニ命シテ之ヲ誅セシム、高資覺リ、高頼ヲ捕テ之ヲ派ス、衆皆憤怒ス、摂津ノ渡邊、大和ノ越智、紀伊ノ安田、皆兵ヲ起シ、高時命シテ之ヲ討タシム、又々克タス、○正中元年九月初メ上皇北條ノ專權ヲ憤リ、密カニ議スル所アリ、帝已ニ位ニ即キ精ヲ勵シ、治ヲ求ム、高

時政ヲ失ヒ高資權ヲ恣ニシ、將士心ヲ離スヲ見テ大ニ悦ビ、是時ニ來ノ之ヲ誅滅セント欲シ、中納言資朝石少辨俊基ト謀リ、武人ノ用ユ可キ者ヲ撰ム、時ニ美濃ノ人土岐頼兼多治見國長素ヨリ勇名アリ、會々來テ京師ニ居ル資朝引テ、援ト為ント欲シ、俊基及ヒ大納言師賢中納言隆資左衛門尉實世、參議成輔、足助重範及ヒ僧玄基、游雅等ト驩ヲ二人ニ結ビ、會飲スル毎ニ衣冠ヲ脱シ、禮節ヲ破リ、婦女ヲ酒ヲ行ハシメ、稱メ無禮講ト曰フ、二人遂ニ心ヲ傾テ相謀ル、又々外議ヲ憚リ、僧玄慧ヲ召シテ、韓文ヲ講セシム、已ニノ頼兼ノ族頼春妻ト語テ謀ヲ

洩ス、妻族滅ノ罪ヲ恐レテ、其父齋藤利行ニ告ク利行ハ
六波羅ノ吏ナルヲ以テ直チニ之ヲ其府ニ訴フ北條範
貞急ニ兵ヲ發シテ頼兼國長ヲ襲フ、二人力闘シテ自殺
ス尋テ資朝俊基ヲ執ヘテ鎌倉ニ送ル鞠問スレモ服セ
ズ、俊基ニ問ニ無禮講ヲ以テス、俊基曰、吾ハ文臣ナリ、他
ヲ知ラス、唯玄慧カ文ヲ講スルヲ知ル、是文禮講ナリ、謬
リ傳ヘテ無禮講ト為スノミ、高時怒ルト甚シ、相議シテ
帝ヲ廢セントス、帝之ヲ聞テ中納言宣房ヲ鎌倉ニ遣リ、
誓昏ヲ高時ニ賜フ、夏乃チ止ムヲ得タリ、高時俊基ヲ
釋シ、資朝ヲ佐渡ニ流ス、○嘉曆元年三月、皇太子邦良親

王薨ス、高時量仁親王ヲ立テ、皇太子ト為ス、時ニ天皇
第三ノ皇子護良親王、天姿英武、帝之ヲ愛シ、邦良親王ニ
代ント欲シテ、昔ヲ高時ニ諭ス、高時兩紆迭立ノ約ヲ執
テ詔ヲ奉セス、親王遂ニ駭ヲ削ル、明年詔ノ延曆寺ノ座
主ニ補シ、大塔ニ居ル因テ大塔宮ト稱ス、蓋シ僧徒ノ心
ヲ結ヒ其カヲ藉ラント欲スルナリ、親王講読ヲ廢シテ
武技ヲ習フ、韜畧ニ通シ、矯捷絶倫、○元徳二年四月、大判
事中原章房ヲ殺ス、帝北條氏ヲ討ツノ舉ヲ章房ニ謀ル、
章房固ク之ヲ諫ム、帝語ノ泄ンコトヲ恐テ、参議成輔ニ命
ス、成輔俠客瀬尾太郎ヲノ之ヲ刺サシム、後チ其子章信

瀬尾太郎ヲ殺シテ讐ヲ復ス。○五月、北條高時、僧圓觀文
觀等ヲ捕ヘテ流ニ處ス。其密詔ヲ受ケテ北條氏ヲ呪詛
スルヲ以テナリ。○元弘元年七月六波羅兵ヲ遣テ再ヒ
右中辨俊基ヲ執ヘテ鎌倉ニ送ル。時ニ後伏見上皇モ亦
タ使ヲ鎌倉ニ遣テ具サニ朝廷ノ謀ヲ告ク。於是事大ニ
泄レ高時諸將吏ヲ會シテ計ヲ問フ。衆敢テ言フ者無シ。
長崎高資進テ曰、主上親王ハ之ヲ流シ公卿ハ之ヲ斬レ、
事乃チ定マラン。二階堂貞藤諫テ曰、武門國權ヲ執ル下、
百五十年ニ幾キ者ハ他無シ。天朝ヲ敬ヒ下民ヲ惠ムヲ
以テナリ。今已ニ公卿ヲ執ル。又主上ヲ遷サント欲ス。恐

ラクハ神人ノ怒ニ遇ハン。苟モ我ニ蒙無クシハ朝廷我
ヲ圖ルト雖モ誰カ取テ之ニ與セン。高資色ヲ作メ曰、文
武ノ道緩急用ヲ異ニス。公承久ノ故事ヲ知ラサルカ。高
時其言ヲ然リトシ。八月高藤等ニ命シ三千騎ヲ率テ西
ニ上リ、夜ル六波羅ニ入ル。護良親王謀メ之ヲ知リ、即夜
ニ使ヲ馳セテ之ヲ奏シ、且ツ計ヲ獻ス。帝其謀ニ從ヒ、潛
カニ陽明門ヨリ出テ、籃輿ニ御シテ南都ニ赴キ、遂ニ笠
置寺ニ幸ス。別ニ大納言師賢ヲメ袞衣ヲ服シ、御輿ニ乘
シ詐テ帝ト稱シテ延曆寺ニ赴カシム。僧徒大ニ喜ヒ來
リ聚ル者一萬人。六波羅ノ帥、仲時、時益等之ヲ知ラス。兵

ヲ遣テ宮中ヲ索ム帝ヲ獲ス己ニメ叡山ニ幸スト聞テ
兵ヲ遣テ之ヲ攻ム護良王僧兵ヲ督シテ之ヲ辛崎ニ破
ル己ニメ僧徒等真ノ天子ニ非ルヲ知テ皆散シ去ル師
賢奔テ行在ニ至ル○時帝笠置ニ在リ勤王ノ師至ル
者ナシ帝憂悶シ一夜夢ムラク紫宸殿ノ前ニ大樹アリ
南枝最モ茂リ虚位ヲ其下ニ設ケ二童アリ垂涕メ指シ
テ曰天下唯此座アリ陛下ヲ安ニス可シト既ニ覺テ以
為ラク木南ニ從フハ楠ナリ意フニ楠姓ノ人朕ヲ輔ケ
テ再ニ帝位ヲ正ス可シ因テ山僧ヲ召シテ之ヲ問フ對
テ曰金剛山ノ西ニ楠正成ト云者アリ楠諸兄ノ裔其父

志貴山ニ禱テ生ル故ニ小字ヲ多門ト云長メ材武ヲ以
テ著ル帝曰是ナリ乃チ中納言藤房ヲ遣テ之ヲ召ス正
成從テ至ル帝大ニ悅ビ敕メ曰興復ノ事皆汝ニ委任ス
因テ計ヲ問フ正成對テ曰逆賊自ラ天誅ヲ招ク之ヲ誅
スル何カ有シ東人勇有テ智無シ勇ヲ以テ争フ片ハ天
下ノ兵武藏相摸ニ當ルヲ能ハス智ヲ以テセシカ臣ニ
策アリ然レ勝敗ハ常ナリ小奴ヲ以テ宸慮ヲ煩ハス勿
レ苟モ正成死セシハ何ソ濟ラサルヲ患シ即拜辭メ
歸ル○九月北條高時量仁親王ヲ奉シテ帝ヲ京師ニ稱
ス是ヲ光嚴帝ト為ス○六波羅ノ鎮將仲時時益帝ノ笠

置ニ在ルヲ聞テ兵七萬ヲ發シテ之ヲ犯ス三河ノ人足
助重範等善ク拒ハシ賊克ツコ能ハス備後ノ人櫻山茲
俊兵ヲ起シテ之ニ應シ一宮城ニ據ル高時更ニ大佛堂
直金澤貞時等ニ命シ兵十餘萬ヲ率テ赴キ援ク未タ至
ラス陶山義高小見山氏真風雨ニ乘メ城ニ入テ火ヲ縱
チ笠置即チ陷ル錦織俊政石川義純等之ニ死シ重範擒
セラル帝潜カニ笠置ヲ出ツ群臣逃散シ唯藤房及ヒ弟
季房役ヲ扶行三日赤坂ニ幸セントス疲ル、ト甚シ帝
二臣ト岩ニ倚テ假寐ス松露御衣ヲ沾ホスヲ見テ歌ヲ
咏メ曰サシテ行ク笠置ノ山ヲ出シヨリアメガ下ニハ

隠レ家モノシ藤房涕ヲ拭テ奉和メ曰イカニセシ頼ハ
陰トテ立ヨレハナヲ袖ヌラス松ノ下露己ニノ賊ノ追
騎竹輿ヲ奉シテ至リ護送シテ平等院ニ入ル親王以下
文武ノ百僚ミナ執ヘラル貞直等奏シテ神器ヲ新帝ニ
傳ヘンコヲ請フ帝許サスシテ曰神器ハ親ク授受スル
所臣下ノ與奪ス可キニ非ス且ツ寶劔ハ身ヲ離ツ可カ
ラス仲時時益等六波羅ニ幸センコヲ請フ帝乃チ行幸
ノ儀ヲ備ヘシメテ而ノ行ク殿法印良忠帝ヲ奪ハンコ
ヲ謀レ成ラス○十月楠正成兵ヲ起シテ勤王シ赤坂城
ニ據ル賊ノ大軍之ヲ攻ム克タス正成ノ赤坂ニ城ク城

方二町可^ガリ三面平地、民儲ヲ收テ糧ト為ス、乃チ乘輿ヲ
城中ニ奉セントス、城正ニ成テ笠置陷ル、大佛貞直等六
十三將、徑チニ赤坂ニ向フ、兵凡ソ三十萬人、而ノ城兵僅
カニ五百人、正成其三百ヲ分ツテ弟正季及ヒ和田正速
ニ授テ山中ニ伏ス、東軍其城ノ狹小ナルヲ見テ笑テ曰
「隻手ヲ以テ提ク可シト、埤ニ薄テ争ヒ攻ム、城兵駢立亂
射シ、立トコロニ千餘人ヲ殺ス、東軍驚キ沮テ退ク、乃チ
甲ヲ卸シテ憩フ、伏兵ツノ左右ニ起リ、鼓譟ノ營ヲ襲フ、
正成門ヲ開テ突テ出テ、三面合シ撃ツ、東軍大ニ驚乱シ、
器械ヲ棄テ、走ル、明日又來リ攻メ、之ヲ圍ム、數重、正

成豫メ復垣ヲ設ケ、敵ノ蟻附ノ上ルヲ俟テ其繩ヲ断ツ
垣倒レテ千餘人ヲ壓殺ス、因テ大木巨石ヲ投シ七百餘
人ヲ斃ス、敵又夕楯ヲ蒙リ矢石ヲ避テ進ミ、鐵搭ヲ以テ
垣ヲ鉤シ、垣マサニ崩レントス、正成機ニ應シ、人コトニ
長柄ノ杓ヲ執テ沸湯ヲ沃カシム、敵皆糜爛メ退ク、東軍
恐レ、退テ營ヲ築キ持久之計ヲ作ス、時ニ城中僅カニ五
日ノ糧ヲ餘マス、正成因テ計ヲ設ケ、大坑ヲ鑿テ屍ヲ填
ツメ、薪ヲ其上ニ積ミ、一卒ヲ留テ戒メテ曰、我カ去ル
速キヲ度リテ火ヲ縱テト、風雨ノ夜ニ乘メ逃レ出テ、金
剛山ニ入ル、敵之ヲ知ラス、火ノ起ルヲ見テ争テ城ニ入

リ、坑中ノ焚屍ヲ見テ謂ラク正成等既ニ死セリト、遂ニ
兵ヲ引テ東ニ還リ、湯淺定佛ヲノ城ヲ守ラシム、櫻山茲
俊、己ニ國中ヲ畧定シテ、隣國ヲ攻ントス、赤坂陷ルヲ聞
テ、吉備津祠ニ詣リ、妻子ヲ殺シテ自殺ス、○二年三月、高
時帝ヲ隱岐ニ遷ス、參議源忠頭及ヒ嬪藤原氏從テ佐々
木高氏兵三千ヲ以テ護送ス、兒島高德之ヲ奪ントテ謀
レ、高德備前兒島ノ人、備後三郎ト稱シ、父範長備後守タ
リ、帝ノ笠置ニ在ル、父子兵ヲ率テ難ニ赴ントス、其陷ル
ヲ聞テ止ム、是ニ至テ帝ノ西遷ヲ聞キ、衆ニ誓テ駕ヲ奪
ヒ義ヲ舉シト欲シ、兵ヲ率テ舟坂山ニ待ツ、己ニノ駕山

陰道ヲ過ルト聞キ、間道ヨリ馳セテ杉坂ニ至レ、則チ
駕己ニ過ク、高德悵恨シテ罷ムト能ハス、服ヲ妻メ、駕ニ
從ヒ行クヲ數日、遂ニ帝ヲ見ルヲ得ヌ、於是夜ル潛カ
ニ帝ノ館ニ入り、櫻樹ヲ削テ之ヲ白シ、昏メ曰、天莫空句
踐時、非無范蠡、明日兵士聚リ視テ、誦ムト能ハス、乃チ之
ヲ奏ス、帝之ヲ視テ心竊カニ悦フ、四月、車駕隱岐ニ至リ
國分寺ヲ以テ宮ト為シ、佐々木清高兵ヲ以テ監護ス、高
時又ク尊良宗良恒良ノ三親王ヲ派シ、足助重範、平成輔、
藤原資朝、俊基、源具行、等ヲ殺シ、藤原師賢、藤原房季、房公、敏
ヲ遠遷ス、獨リ兵部卿護良親王、逃レテ吉野ニ奔ル、○四

月、楠正成金剛山ヲ出テ、五百騎ヲ以テ赤坂城ヲ攻メ、奇
計ヲ用ヒ一舉シテ之ヲ拔ク、定佛正成ニ降ル、其兵ヲ并
セ、河内和泉ヲ徇テ悉ク之ヲ下シ、渡邊ニ至ル比ホヒ兵
二千人進テ天王寺ニ陣ス、京畿大ニ震フ、六波羅即チ隅
田通倫高橋宗康ニ命シ五千騎ヲ將テ之ヲ撃ツ、正成兵
ヲ分テ四隊ト為シ、其三ヲ天王寺ノ側ニ伏セ、弱卒一隊
ヲ以テ渡邊橋ヲ守ラシム、皆羸馬繩纏、戰已ニ接ス皆支
ル敵追撃ノ天王寺ヲ過ク、三伏齊ク發ス、敵兵驚キ支リ、
橋ヲ争テ溺ル、者筭無シ、我兵之ニ乘シ、撃テ之ヲ破ル、
府帥又夕宇都宮公綱ニ命シ、五百騎ヲ以テ來リ攻ム、正

成曰、彼レ寡兵ヲ以テ敗ヲ承ク、志必死ニ在リ、天下ノ事
今日ノミナラス、妄リニ我士ヲ損ス可カラス、吾且ツ奇
ヲ出メ之ヲ卻ケント、遂ニ兵ヲ引テ退ク、居ルヲ數日、炬
火數千、四面ニ星羅シ、益々多ク益々逼ル、公綱嚴備シテ
侍ツト三晝夜、其兵ミナ危惧ノ曰、敵兵日々ニ加ハルナ
リ、公綱遂ニ兵ヲ引テ退ク、○護良親王兵ヲ吉野ニ起ス、
初メ親王南都ノ般若寺ニ奔リ、賊兵來リ索ルニ及テ、經
函ノ中ニ匿レテ免ル、トヲ得、遂ニ從士九人ト道士ノ
裝ヲ為シテ紀伊ニ赴キ、轉ノ十津川ニ至リ、豪族戸野兵
衛ノ宅ニ過ル、會々其妻疾アリ、見テ驗者ト為シテ祈讓

ヲ請入親王為ニ之ヲ祈ル疾即チ愈ユ兵衛大ニ悦ビ衆
ヲ留ル一旬餘一日語次ニ謂テ曰側カニ聞ク大塔宮窮
厄ノ熊野ニ入ルト別當定遍北條氏ニ暱シ恐クハ免ル
、一能ハス若シ此ニ臨セハ僕生死之ヲ奉セン地險ニ
ノ人勇ナリ誰カ犯ス一ヲ得ン昔日平維盛來テ吾祖ニ
依テ免ル、一ヲ得タリト衆聘昭相目シ遂ニ告ルニ實
ヲ以テス兵衛驚喜ノ下リ拝シ即日關ヲ置テ守備ヲ修
メ土兵來リ屬ス居ル一數月親王疑ヲ蓄ヘ其族ノ誘テ之
ヲ娶ル定遍之ヲ聞テ王頭ヲ千金ニ贖ヘ其族ヲ誘テ之
ヲ圖ラシム王遂ニ去テ高野ニ赴ク過ル所皆賊黨ナリ

芋瀬莊司ノ門ニ踵テ音ヲ諭ス莊司曰願クハ章旗或ハ
近臣ヲ獲テ證ト為シ赤松則祐往カント請フ平賀三郎
止メテ曰危難ノ際一士ヲ失フ可カラス遂ニ錦旗ヲ與
ヘテ過ク村上義光從テ後ル途錦旗ヲ掲クル者ニ遇フ
怪ミ問テ故ヲ知り乃チ大ニ怒リ其人ヲ捉ヘテ扱ル一
二丈可リ錦旗ヲ奪テ追ヒ及フ明日王置莊司兵ヲ以テ
路ヲ扼ス斥岡八郎矢田彦七往テ音ヲ諭ス聴カス八郎
鬪テ死シ彦七返テ狀ヲ白フス親王終ニ死ヲ決シ進テ
戰ハントス野長瀬六郎兵三千餘騎ヲ以テ來リ援ケ擊
テ王置ノ兵ヲ破リ遂ニ奉ノ吉野ニ至リ山徒ヲ招諭シ

テ愛善塔下ニ城キ、乃チ兵ヲ舉ク。○八月、護良親王、從士
赤松則祐ヲ播磨ニ遣リ、令ヲ其父則村ニ下シテ、義ヲ倡
ヘシム。則村大ニ喜ヒ、即チ苜繩ニ城テ、兵ヲ舉ク。以テ山
陰山陽ノ兩道ヲ絶ツ。是ヨリ京師鎮西ノ援ヲ失フ。楠正
成、金剛山ノ千劔破ニ城ク。城東西整ニ臨ミ、南北金剛山
ニ接シ、周廻一里高サ數十仞。平野將監ヲ赤坂城ヲ守
ラシメテ、自ラ之ニ依ル。○三年正月、天皇隱岐ニ在リ。○
二月、北條高時大ニ兵ヲ發シ、二階堂貞藤、大佛高直、阿曾
時治等ヲ將ト為シ、兵三十萬分ツテ三軍ト為リ、金剛山
及ヒ吉野赤坂ヲ攻ム。赤坂ノ城、兵善ク拒ミ、東軍死傷甚

多ク、旬餘ニメ抜ケス。或阿曾時治ニ謂テ曰、城山巔ニ倚
テ水ニ足ル、蓋シ暗渠アルナリ、乃チ水道ヲ絶フ。時ニ又
早將士困渴ス、敵火箭ヲ放テ樓櫓ヲ焚ク。將監力竭テ、遂
ニ降ル。二階堂貞藤、吉野ヲ攻ムルト甚ク急シ、七日休セス。
城兵カラ竭メ拒ミ、東軍屢々卻ク。賊ノ嚮導岩菊ナル者、
精兵百餘人ヲ率テ、霄ル金峰ヲ攀テ、城ニ入ル。城中險ヲ
恃テ之ヲ知ラス、詰朝戰復タ合スルニ及テ、百餘人火ヲ
放テ、各所ニ起リ、城中大ニ擾ル。親王藏王堂ヨリ之ヲ見
テ、手ツカラ薙カヲ揮ヒ、左右ヲ率テ奮撃ス。賊悉ク敗レ
走ル。王七箭ヲ負ヒ、二創ヲ蒙リ、流血淋漓。幕ヲ塞ケテ酒

ヲ庭中ニ飲ム、木寺相摸、賊首ヲ薙刀ニ貫テ以テ舞フ、衆
驩然タリ、義光前門ヨリ至ル箭ヲ被ル、蝟ノ如ク跪テ
曰、前門ノ戰急ナリ、臣中軍驩呼ノ聲ヲ聞テ來ル、然レ城
方ニ危シ、君當サニ圍ヲ脱ノ後圖ヲ為ス可シ、臣請フ君
ノ衣甲ヲ賜ハリ、佯テ王ト稱シテ死セン、王方ニ大杯ヲ
舉ク、笑テ曰、共ニ死セン耳、義光愠テ曰、君此大事ヲ舉テ
何ソ量ノ小ナルヤ、直チニ進テ王ノ甲帶ヲ釋キ、悉ク其
服ヲ易フ、王即チ逃臣ヲ率テ出テ走ル、義光城櫓ニ登リ
大ニ呼テ王ト稱シ、緋甲ヲ脱シテ之ヲ投シ、素衣錦裳、腹
ヲ割テ腸ヲ出シ、及テ啣テ伏ス、賊軍其首ヲ争フ、王已ニ

走テ天河至ル、賊復タ途ヲ遮ルニ遇フ、義光ノ子義隆
之ニ死シ、王竟ニ高野山ニ逃ル、貞藤王ノ首ヲ京ニ送ル
真ナラス、因テ又タ山中ヲ索ムレ、終ニ王ヲ獲ス、乃チ
軍ヲ引テ千劔破ニ赴ク、○吉野赤坂既ニ陥リ、東軍悉ク
千劔破ニ萃ル、西南諸道ノ兵嚮ニ鎌倉ノ徵ニ應スル者
亦皆來リ會シ、凡ソ八十萬、正成千餘人ヲ以テ之ニ當ル
賊軍衆ヲ恃テ、四面ヨリ仰キ攻メ、喊聲天地ヲ動カス、城
上矢石雨ノ如ク下リ、東軍重沓、箭ニ鹿發ナシ、軍監長崎
高資、十二人ヲメ死傷ヲ記セシム、三昼夜筆ヲ閣ス、乃チ
令ヲ下シテ戰ヲ止ム、時ニ久早賊軍火箭ヲ以テ城ヲ射

正成噴筒ヲ以テ水ヲ潑シ、焚クヲ雖ハス、賊將等議ノ
曰、山城水ニ乏キヲ常ナリ、此城亦タ赤坂ノ如ク、夜ル東
麓ノ溪ニ汲ムノミ、即チ名越越前守ヲ遣リ三千人ヲ以
テ東溪ヲ守ラシム、城中ニ泉五道アリ、早ト雖ヒ涸レズ、
正成大槽數百ヲ造テ之ヲ蓄ヘ、雨フル毎ニ屋溜ヲ槽ニ
受ク、故ニ水常ニ足リ、出テ溪水ヲ汲ム者ナシ、數日ニシテ
守者稍怠ル、正成之ヲ伺ヒ、夜ル兵ヲ遣テ撃テ之ヲ走ラ
セ、其旗幕ヲ奪テ廻ル、明日之ヲ城上ニ張テ呼テ曰、是レ
名越公ノ賜ヲ所ナリト、名越慙念シ、兵五千人ヲ督シテ
柵ヲ拔テ進ミ攻ム、城兵下スニ大木ヲ以テシ、射ルニ効

子ヲ以テス、賊兵死スル者四千餘人、益々畏レテ攻ル者
ナシ、正成城兵ノ倦ムヲ見テ、藁人數十ヲ作り、被スルニ
甲冑ヲ以テシテ、之ヲ城外ニ列シ、曉霧ニ乘シテ、鼓譟シ
テ之ニ從フ、敵争フテ藁人ニ集ル、巨石下ルヲ雷ノ如ク、
是ヲ折リ首ヲ碎キ、死スル者八百餘人、是ヨリ復タ城ニ
近ソク者無ク、長圍ヲ築テ飲博日ヲ度ルノミ、三月高時
使者ヲ以テ諸將ヲ督責ス、諸將會議シ、工ヲ聚テ雲梯ヲ
造ル、長サ二十丈、載スルニ銳兵ヲ以テシ、谷ニ跨テ城ニ
乗セント欲ス、正成命シテ大炬數十ヲ投シ、機ヲ以テ油
ヲ注カシム、梯上ノ兵驚噪狼狽、梯忽チ断ヘ、崖谷ニ陷テ

死スル者數千人、賊軍如何ヒスルヲ能ハス、仲時之ヲ聞
テ宇都宮公綱ニ命シテ之ヲ援ケシム、公綱生兵ヲ以テ
攻撃スルヲ十昼夜、城址ヲ鑿テ樓櫓ヲ崩ントス、正成機
ニ應ノ之ヲ防ク、竟ニ抜クヲ能ハス、時ニ護良親王大和
ノ土寇ニ命ノ、賊ノ糧食ヲ奪ハシム、賊大ニ困シテ逃亡
スル者相踵ク、新田義貞亦夕從テ敵中ニ在リ、素ヨリ北
條氏ノ為ニ驅使セラシム、ヲ憤リテ、歸順ノ志アリ、乃チ
親王ノ令旨ヲ得シトテ欲シ、其臣舟田義昌ニ謀ル、義昌
土寇ニ因テ意ヲ親王ニ通ス、親王其名旗ヲ知テ即チ令
旨ヲ賜フ、權リニ詔辭ヲ用ウ、義貞大ニ喜ビ、明日疾ト稱

シテ東ニ還ル、○是月、上居通治得能通言、兵ヲ伊豫ニ起
シ、長門探題北條時直ヲ星岡ニ逆ニ擊テ大ニ之ヲ破リ、
赤松則村進テ摩耶山ニ據テ以テ京畿ニ逼ル、高時四方
勤王ノ師起ルヲ以テ、謀ヲ行在ニ通スル者有シトテ畏
レ、佐々木清高ニ命ノ護衛ヲ嚴ニセシム、清高日夜警巡
シ、内外通スルヲ得サラシム、清高ノ旗義綱中門ヲ守ル、
竊カニ帝ヲ脱ノ義ヲ舉シトテ謀リ、未夕間ヲ得ス、一夜
帝侍姫ニ命ノ酒ヲ守兵ニ賜フ、義綱因テ密カニ奏ノ曰、
陛下未夕聞カスヤ、楠正成金剛山ニ據リ、東兵百萬之ヲ
攻テ抜クヲ能ハス、赤松則村摩耶山ニ屯シ、伊東惟群寨

ヲ三石ニ築キ、土居得能義ヲ四國ニ倡テ、是皇運興復ノ
秋ナリ、陛下臣カ直日ヲ以テ、急ニ千波港ヨリ出雲伯耆
ノ間ニ幸ス可シ、臣佯リ追テ駕ヲ奉セシ、帝心ニ喜ヒ侍
姫ヲ賜フテ之ヲ察ス、其志益々堅シ、帝乃チ義綱ヲ出雲
ニ遣テ其族ヲ招キ來ラシム、未タ返ラス、乃チ源忠頭ト
謀リ、偽ハツテ宮嬪ト稱シテ、夜ル潜カニ宮ヲ出テ、暗夜
徒行ス、忠頭之ヲ扶テ、一民家ニ至リ、千波港ヲ問フ、主翁
其貴人ナルヲ察シ、帝ヲ負テ港ニ至ル、舟人亦々其常
人ニ非ルヲ知り、跪テ往ク所ヲ請フ、忠頭告ルニ實ヲ以
テノ曰、是當今ノ天子也、舟人感喜シ、纜ヲ解テ南ニ馳ス、

天明清高輕舸ヲ以テ追ヒ至ル、舟人即チ帝ト忠頭ヲ舩
底ニ匿シテ、板ヲ施シ覆フニ、鮑魚ヲ以テ舩舳其上一ニ
操ル、清高舟ニ上テ搜索シ、問テ曰、汝貴人ヲ見ルカ、舟人
曰、然リ冠ヲ著ル者、烏帽ヲ著ル者二人、夜半港ヲ出ツ、因
テ指シテ曰、彼方ニ去ルト、清高等舟ヲ轉シテ馳セ去ル、
帝ノ舩遂ニ名和港ニ達ス、忠頭岸ニ登テ其地ノ豪族ヲ
問フ、答フルニ名和長年ヲ以テス、忠頭直チニ其居ニ踵
テ、旨ヲ傳フ、長年大ニ喜ヒ、其四子ト謀リテ、帝ヲ舩上山
ニ奉シ、倉粟五千餘石ヲ運ヒ、樹ヲ伐テ柵ヲ立テ、扉ヲ列
メ垣ト為シ、布旗數百ヲ作り、近國武人ノ徽號ヲ印シテ、

之ヲ山上ニ列ス、已ニメ清高三千人ヲ率テ來リ犯ス、山
上ノ旗號ヲ見テ敢テ進マス、長年ノ兵俯シテ賊軍ヲ射
ル、佐々木輝正箭ニ中テ死シ、佐渡前司兵八百ヲ以テ降
ル、此夕大ニ雷雨ス、長重長成等乘ノ、大ニ清高ノ軍ヲ破
ル、清高逃レ歸ル、國中既ニ畔キ、入ルヲ得ス、遂ニ六波羅
ニ奔ル、於是塩谷高貞、義綱ト兵ヲ率テ出雲ヨリ來リ、兜
島高德備前ヨリ至リ、近國ノ諸豪風ヲ望テ來リ歸ス、○
三月、此時ニ當リ赤松則村、連リニ六波羅ノ兵ヲ破ル、仲
時更ニ兵二萬ヲ遣テ之ヲ桂川ニ拒ル、則祐先登又又大
ニ之ヲ破リ、進テ京師ニ入リ、山崎ニ軍ス、六波羅ノ兵來

リ攻ム、則村又夕之ヲ西岡ニ破ル、護良親王、法印良忠ヲ
遣テ兵ヲ率テ則村ヲ援ク、帝舟上山ニ在リ、忠頭高德ヲ
遣テ六波羅ヲ攻メシム、忠頭丹波ニ至ル、太田守延ヒリクダシネ恒良
親王ヲ奉メ來リ會ス、忠頭即チ王ヲ奉シテ將軍ト為シ、
進テ峰堂ニ陣ス、而メ則村山崎ニ陣シ、良忠八幡ニ軍シ、
カヲ戮セテ京師ヲ攻ントス、已ニノ忠頭功ヲ貪テ獨リ
進ミ、大宮下ニ戰テ大ニ敗ル、太田守延之ニ死ス、忠頭退
テ男山ニ據ル、○北條高時京師ノ急ナルヲ聞テ名越高
家足利高氏ニ命シテ之ヲ援ス、時ニ高氏疾アリ辭スレ
氏聽ケス、高氏念リ竊カニ亂ニ乘メ家ヲ興サント欲シ、

妻孥ヲ挈テ發ス、高時之ヲ疑フ、高氏乃チ誓昏ヲ作リ、妻
子ヲ留メテ而シテ西入、已ニ京師ニ至リ、密カニ人ヲ行在
ニ遣テ降ヲ請フ、帝素ヨリ其家聲ヲ聞キ喜テ之ヲ許ス、
高家進テ忠顯則村ト狹川ニ戰フ、高家驍勇ヲ以テ著ル、
鮮甲ノ衆ニ先チ擊テ官軍ヲ破ル、赤松範家射テ之ヲ斃
ス、餘衆皆潰エ支ル、高氏時ニ宴ヲ桂川ニ張テ戰ハス、高
家カ死スルヲ聞テ即チ兵ヲ勒メ西シ、篠村ニ次ス、高氏
家聲素ヨリ著ル、遠近來リ屬シ、衆五萬人進テ神祇官ノ
址ニ陣ス、○五月七日、源忠顯竹田ヨリシ、則村良忠東寺
ヨリシ、高氏ト勢ヲ合メ、六波羅ヲ圍ム、府兵支エレト能

ハス、逃亡相踵ク、仲時時益、新帝及ヒ二上皇ヲ奉シテ東
ニ奔ル、土寇群起ノ之ヲ要シ、時益矢ニ中テ死ス、仲時走
テ近江ノ番馬驛ニ至ル、郷兵數千人守良親王ヲ奉メ、險
ニ據テ要擊ス、仲時佛寺ニ入テ自殺シ、從兵四百餘人皆
死ス、忠顯等新帝及ヒ二上皇ヲ奉メ、京師ニ還ル、東軍ノ
千劍破ヲ圍ム者悉ク營ヲ拔テ南都ニ走リ、而シテ捷聞行
在ニ至ル、帝乃チ舟上山ヲ發ス、長年等乘輿ヲ護シ、百官
戎服ノ兵庫ニ至ル、義貞使ヲ以テ鎌倉ノ捷ヲ報ス、楠正
成七千騎ヲ以テ迎ヘ、謁ス、帝親ク之ヲ勞ノ曰、朕カ今日
有ルハ皆汝忠戰ノ力ナリト詔メ、前驅ヲラシメ、六月六

日、車駕京師ニ入ル、乃チ巡狩宮ニ還ルノ儀ヲ用ヒテ闕
ニ歸リ、新帝ヲ廢メ大位ニ復シ、正慶ノ號ヲ去リ、新帝署
スル所公卿ノ官爵ヲ削リ、闕白ヲ置ケテ罷テ、天皇自ラ
政ヲ聽ク、

國史攬要卷之五

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

